



# 感性&体験型研修

創造性発揮、チームワーク向上、多様性理解などを目的とした感性や身体に関する研修について、東京理科大学の井藤元先生と編集部員がプログラムを体験し、そのナゾを解き明かしていく随時連載。今回は株式会社トライアングル・トラストが提供する「レゴ® シリアスプレイ® 技法と専用教材を用いたワークショップ」を体験してきました。

レゴ® ブロックを使った個人ワークとその後のグループでの共有によって、個人・チームにどういった変化がおとずれるのか。「プログラム内容」（編集部）と「プログラム解説」（井藤先生）からみていきます。

## 随時連載 | 第 6 回 レゴ® シリアスプレイ®

### プログラム内容

#### 「レゴ® シリアスプレイ®」について

デンマークの玩具メーカー・レゴ社が2001年に開発した企業向け教育プログラム。教育理論「コンストラクショニズム」がベースとなっており、専門教育を受けたファシリテーターの問いのもと、レゴブロックを使った作品づくりや他者との共有を通じて、チームビルディングや組織ビジョンの共有などを図っていく。トライアングル・トラストが提供する法人プログラムに参加した企業は2024年12月18日現在、165社以上に上る。

#### 特徴

- 効率的  
短時間で高い効果が得られる
- 平等性  
ファシリテーターによって発言・質問時間が区切られているため、発言者が偏らない
- 記憶に残りやすい  
レゴブロックという「モノ」を通して語りあうことで、視覚的効果が高く、記憶に残る

#### 今回受講した「レゴ® シリアスプレイ® 体験会」

大学生・社会人を対象に対面での体験会を実施。時間は約3時間。参加人数は12人（参加費は諸条件による）。

レゴブロックを使った「レゴ® シリアスプレイ® 技法と専用教材を用いたワークショップ」（以下、レゴシリアスプレイ）は、チームビルディングやコミュニケーション力向上を目的とした研修や、レクリエーションを含めた福利厚生施策など、さまざまな場面で実施されている。そうしたなか、トライアングル・トラストでは、「レゴシリアスプレイ」で基本とされている「問いを受ける→モデルを作る→説明する→気づきを得る」というプロセスのなかで「自己理解」「他者理解」「相互理解」を促し、組織の「課題解決」へとつなげていくことに重点を置いて、企業に対して研修を実施している。

レゴシリアスプレイのワークは、「LEGO® SERIOUS PLAY® メソッド マスタートレーナー協会」（本部デンマーク）に認定されたファシリテーター（民間

資格）によってのみ実施することが可能となる。そこで生み出される「作品」に同じものはほとんどなく、また、使ったブロックの色や形、つなげ方などにその人の考えやこだわりが反映されていることも多い。「心の中にある思い」が目に見える姿で表現できるのも、レゴを使ったワークの特徴だ。

体験会の参加者は、社会人と大学生の12人。ワークは、2グループに分かれて実施した。ここでは、**1** レゴシリアスプレイの基本、**2** 52ピースを使った「ウォーミングアップ」、**3** 問いについて考える「レゴシリアスプレイワーク」についてお伝えする。

### 1 レゴシリアスプレイの基本

最初のウォーミングアップで、レゴブロックの構造や組み立て方などのレクチャーと、全体の流れを

# レゴはなぜ、 「世界一、超天才的なおもちゃ」なのか？

東京理科大学 教育支援機構 教職教育センター 教授 井藤 元

## 哲学的なおもちゃ レゴ

「なぜレゴは世界一、超天才的なおもちゃなのか？」

これは、全世界で5,000万部発行の大ベストセラーとなった『ソフィーの世界』（NHK出版）の物語序盤で、主人公ソフィーのもとに届いた手紙に記されていた問いです。

「世界で一番やさしい哲学の本」として知られる本書では、主人公ソフィーのもとに次々と謎の手紙が届き、哲学の手ほどきが行われます。ソフィーが古代ギリシアの哲学者・デモクリトスの思想を学ぶ際に、冒頭の問いが投げかけられ、彼女はレゴの真価に気づくこととなります。

少し長くなりますが、そのシーンには「レゴ® シリアスプレイ® 技法と専用教材を用いたワークショップ」（以下、レゴシリアスプレイ）の意義を読み解くうえで重要な数多くの視点が含まれていますので、一節を引用したいと思います。

「ソフィーは、レゴが世界一、超天才的なおもちゃかどうかなんて、今の今まで考えたこともなかった。最後にレゴで遊んだのは、もう何年前になるだろう？ それにだいいち、レゴがどうして哲学と関係あるのか、さっぱりわからない。……ソフィーは本当にひさしぶりに、小さなプラスチックのブロックで何かをつくってみた。そのうちに、思いはいつしかレゴをめぐるようになった。レゴで何かをつくるのは

簡単ね、とソフィーは思った。いろんな大きさや形をしているけれど、どのレゴもほかのレゴとくっつくようになっていて。それに、ちとやそとではこわれない。こわれたレゴなんて、見たことないじゃないかな。レゴはどれもみんな、何年も前にもらった時そのままに新品同様だ。そしてなによりも、レゴだとどんな形でもつくれるし、またばらばらにしてぜんぜんちがうものをつくることだってできる。なるほど、これは文句のつけようがない。**レゴは世界一、超天才的なおもちゃと呼ばれるだけのこと**はある、とソフィーは思った。……いつのまにか、大きな人形の家ができていた。認めたくはないけれど、こんなに面白いことはずっとしてなかった。人はどうして遊ばなくなるのかしら？ 母は、帰ってきてソフィーの人形の家を見ると、ぷと吹き出した。「あらまあ、そんなもので遊んじゃって、小さい子みたい」。（『ソフィーの世界 哲学者からの不思議な手紙 上』、62頁）

レゴを使えば、ありとあらゆる形を生み出すことができ、しかも、あとでバラバラにできる。バラバラにした後は、同じレゴを使ってまた無数の新しい世界を作り出すことができる。そんなレゴの性質が、デモクリトスの原子論（すべては目に見えないほど小さなブロックが組み合わさってできていて、そのブロックの一つひとつは永遠に変わらないという考え）にぴたりと符合するというのです。

事実、驚くべきことに、標準的な2×4のレゴブロックをたった6つ用意するだけで9億通りの組み